



「気候の文化史—氷期から地球温暖化まで」

ヴォルフガング・ペーリンガー 著・

松岡尚子ほか訳

丸善プラネット, 2014年2月

355頁, 2,800円 (本体価格)

ISBN 978-4-86345-192-6

本書は、原書第5版（2010年、初版：2007年）の翻訳本である。著者は歴史の専門家で、文書記録のある、「気候危機」の小氷期に重点をおいて、「気候変動に対するさまざまな文化の対応」を主テーマとしている。地球の誕生以来の地質学的スケールの古気候の変化という背景を述べたうえで、特にヨーロッパ中世において、農作物などへ深刻な影響を及ぼした寒冷な時代の下で人々や社会がどう対処し、結局は現在に至る文化発展を遂げたかという歴史が興味深く示されている。また本書の注目点である現代の地球温暖化問題に関し、進行中の気候変動の国際交渉や、気候変動に関する政府間パネル（IPCC）の、第4次評価報告書（AR4、2007年）までの活動や知見にもふれている。しかし、近年の気候変動研究や、科学的立場の原則によるその成果評価に対し、特に序章までの部分などで、意図的背景の可能性や知見に対する懐疑など著者の独自見解が示されている点には留意が必要である。

目次は下記の通りである。

まえがき、第5版によせて

序章 はじめに

第1章 気候について

第2章 地球温暖化—完新世

第3章 地球温暖化—小氷期

第4章 小氷期が文化に及ぼした影響

第5章 地球温暖化—現代の温暖期

終章 環境破壊の罪と温室効果ガス気候—結び

あとがき

訳者あとがき

本書の表紙絵は、16世紀の画家ブリューゲルの「雪中の狩人」（1565）であり、狩人や結氷した湖の釣り人などの風景画で、ヨーロッパの小氷期を象徴した絵である。

「まえがき」で、著者は過去（1940年代～70年頃）に寒冷化傾向が生じて地球寒冷化説が出たことに対し、それは誤りだったことを忘れてはいけないとして、地球温暖化へのIPCCの警告に関して、「自然科学上の予報に幻想を抱いてはならない」と警告する。

「第5版によせて」（2010年3月）では、初版後の、コペンハーゲン会議での国際交渉やIPCCのノーベル平和賞受賞やメディア上で指摘されたIPCCへの疑惑問題などを指摘する。特に、クライメートゲート¹¹では「数値が操作され、情報公開法に違反したことが明らかになった」というニューヨークタイムズの記事（2009年）を引用している。しかし実際には「第5版によせて」執筆の前後には、英国議会や大学、IPCC自身などにより、意図的ねつ造などの問題は無かったとする調査結果が報告されている¹²。一方、文化史研究の重要性を強調し、そのような異なる視点から議論を深めることができると結んでいる。

序章では、IPCC第1次評価報告書（1990年）により小氷期を説明する一方、クライメートゲートは信頼性の危機を引き起こしたと述べ、地球温暖化への人為的干渉は今や大いにありそうだが、どの程度かという問題には、「あまり明白な答えは得られていない」との見解も述べている。

第1章では、気候に関し地球誕生にさかのぼって、地質学的な気候変動の推定法や、またその変動原因を示している。さらに、累代、代、紀、世の階層構造をもつ地質学的な時代区分の下に、現在が、顕生代の新生代（後半は氷河期）の第4紀の完新世であることを始め、氷河期、生命大量発生、大量絶滅、人類の進化など、古気候の概略が示されている。

第2章では、現在が氷河期中であり、その最終氷期から約1万年前に温暖化して間氷期となって始まった完新世とともに世界的に拡散した人類の直接的祖先、ホモ・サピエンス・サピエンスが、以前より安定して

¹¹ IPCC第3次評価報告書（2001）で示された、過去千年間の北半球気温の観測値及び代替データからの推定値を示すグラフ（ホッケースティックと称される近年の急上昇）作成に関し、メールのやり取りがハッカーの侵入で流出し、研究者間の表現がメディア上でデータ操作の疑惑として指摘されたなどの問題。

¹² ペンシルバニア大学の発表は2010年2月、英国議会の調査は同年3月の発表。これらの発表の後、ニューヨークタイムズも同年7月には、前の記事を訂正している。IPCCは学術組織（InterAcademy Council）にレビューを依頼し同年8月に報告を受けた。

いるが種々の変動が生じてきた気候の下でどのように文明を築き進化したかを、中世中期の温暖期まで述べている。

第3章では、小氷期に関しその概念導入の起源から始まり、寒冷化原因の諸説、寒冷化による自然・生態系環境への影響を述べ、特に人類には飢饉、飢饉によるペスト蔓延の助長、日照不足によるうつ病などを通して、ヨーロッパにおける文化にどのような影響が生じたかを示している。

第4章では、小氷期の気候危機に関し、宗教支配の下、人間自身の不信心や悪魔に原因を求め、魔女狩りが横行し、音楽や文学でも死や悪魔が取り上げられるといった状況であったが、しだいに、スケープゴート探しではなく、理性に基づく対応の仕方も生じ始め、実際の対処の技術から、自然科学などの文化発展が生じたと述べている。

第5章は、産業革命や食料・エネルギー・医療等の改善を通して社会が発展し、成長の限界が指摘される中で、現代の地球温暖化問題が提起されたとして、IPCCの成立とそのAR4までの科学的知見や、削減の技術的方策や、国際交渉の進展が述べられている。

終章では、中世の小氷期の危機では、人類は結局理性により危機を乗り越えた、現代の地球温暖化でも再び人間にその原因が求められている、として、その危機は小氷期の危機を乗り越えたように、文化の問題と考えれば、過去と同じように、温暖化に適応してゆくだろうと結んでいる。

翻訳は「適応」を「順応」とするなどを除き基本的に適切と感じるが、訳者あとがきは温暖化の原因特定に疑問を呈しているなど、著者の見解が反映されている。

(リモート・センシング技術センター 近藤洋輝)

日本気象学会英文レター誌 SOLA
(Scientific Online Letters on the Atmosphere)
<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/sola/>

第11巻 2015年3月 目次

Masanori OIGAWA, Eugenio REALINI, and Toshitaka TSUDA: Study of Water Vapor Variations Associated with Meso- γ Scale Convection: Comparison between GNSS and Non-Hydrostatic Model Data	27-30
Yoshinori SHOJI, Wataru MASHIKO, Hiroshi YAMAUCHI, and Eiichi SATO: Estimation of Local-Scale Precipitable Water Vapor Distribution Around Each GNSS Station Using Slant Path Delay: Evaluation of a Severe Tornado Case Using High-Resolution NHM	31-35
